

後立山の寂峰から黒部の溪（たに）へ

某年某月

針ノ木岳から北上して白馬・雪倉・朝日岳に至る後立山の稜線は、地理院の2万5千図幅では紙幅の端に位置していて、このあたりから西の立山・劔・毛勝、北の朝日岳などの鳥瞰を得ようとする地形図を下図のように9枚貼り合わせなくてはならない。

毛勝山	樺平		白馬町
劔岳	十字峡		神城
立山	黒部湖		大町

(黒部溪谷) (後立山連峰)

この貼り合わせた地形図を我が猫の額の書斎の畳に並べ蠅になった積もりで旋回してみる。東側には大町市街がぐっと狭まって北上する先に木崎湖、青木湖の湖面がキラキラと輝き、その先には浅間山が薄っすらと煙を吐いている向こうに遙か谷川連峰や越後三山が霞んでいる。

左に目を転ずれば黒部湖の翠の水面にモーターボートが走る一条の波紋が白い。たおやかな立山連峰の北側には峨々たる劔の山巔とそれに続く越中の秘峰、毛勝三山や僧ヶ岳。南から北上してきた飛騨山脈は黒部川で二分され、立山・劔岳山系は劔岳北方稜線から毛勝・僧ヶ岳を經由して烏帽子山で入善に落ち、一方の白馬山系は拇海新道を経由して白鳥山で親不知に落ちている。その先は日本海。

後立山の稜線は鹿島鍾ヶ岳から五龍岳までの区間を除いて概ね東側(信州側)が険しく、西側(越中側)は緩やかである。この事情は南北に走る背稜山脈では何処でも同じで、冬期に西風が運んだ雪が背稜山脈の東側斜面に巻き上げて雪庇を作り、これが往古氷河となって東側斜面を削ったものである。

今回は、後立山連峰のたおやかで静かで(うらぶれた寂しい)どこかの寂峰から劔の壁をノンビリと眺めながら数日間を行雲流水や御神酒を友として過ごし、帰途は名にし負う黒部川支流の陰悪沢を下って黒部溪谷に直接降りるという計画である。

後立山稜線の峰々はポピュラーな縦走コースであり、またそれから派生している大きな支尾根もアプローチとして使われているので、地形図に山名が記載されている寂峰は少ないようだ。僅かに樺平の付近に名劔山や百貫山、中背山が見られるくらいだろう(名前が記載されていない山は腐るほどあるが・・)。

何処かに仙人が住んでいるような秘峰はないか？ 辿り着くには比較的簡単で、のびやかな池塘と草原が存在し、しかもその先が絶壁になって黒部に落ち込み、目の前に劔の威容が真近かに見える所でなければならない。

私ぐらいのベテランになると、並べた9枚の地形図を2メートルくらい上から鳥(或いは蠅)の目を細めて鳥(蠅)瞰すれば、地形の起伏は勿論のこと樹木やハイマツの生え具合、そこで囀っている鳥の声、空を切って飛ぶイワツバメの羽音、溪流を走るイワナの魚影、はては流れる雲や風の音まで聞こえてくるのでア〜ル。

何回か上空を旋回して目と耳を凝らす。あった!!。

後立山のある山頂から派生する尾根が若干の高低を繰り返して黒部に落ちている。尾根の稜線上にはいくつか連なった池塘の記号があり、黒部に落ち込む手前には狭いながらもゆるやかな台地があってここにも池塘が一つ。植物記号はハイマツで、それを囲むように広葉樹の記号がある。ここはそこだけが空に開いた天国ではないか！ それにこのプラトーからは長い沢が黒部溪谷に落ちていて、下半部分は大蛇

がのたうったような岩マークの連続である。ゾクゾクしてくるナア～。幻の大滝があるかも知れない。人跡未到黒部川〇〇沢△△ノ大滝発見、初踏さる！テナ具合。

劔岳東面の眺望は、谷の向きがずれているので、横から眺める格好になるが、源次郎尾根、八ツ峰などの岩尾根、三ノ窓、小窓の雪渓、チンネやクレオパトラ・ニードルの岩峰が見えるであろう。北方稜線の向こうに沈む真っ赤な夕陽を受けた岩のシルエットは黒々として素晴らしいであろうナ。

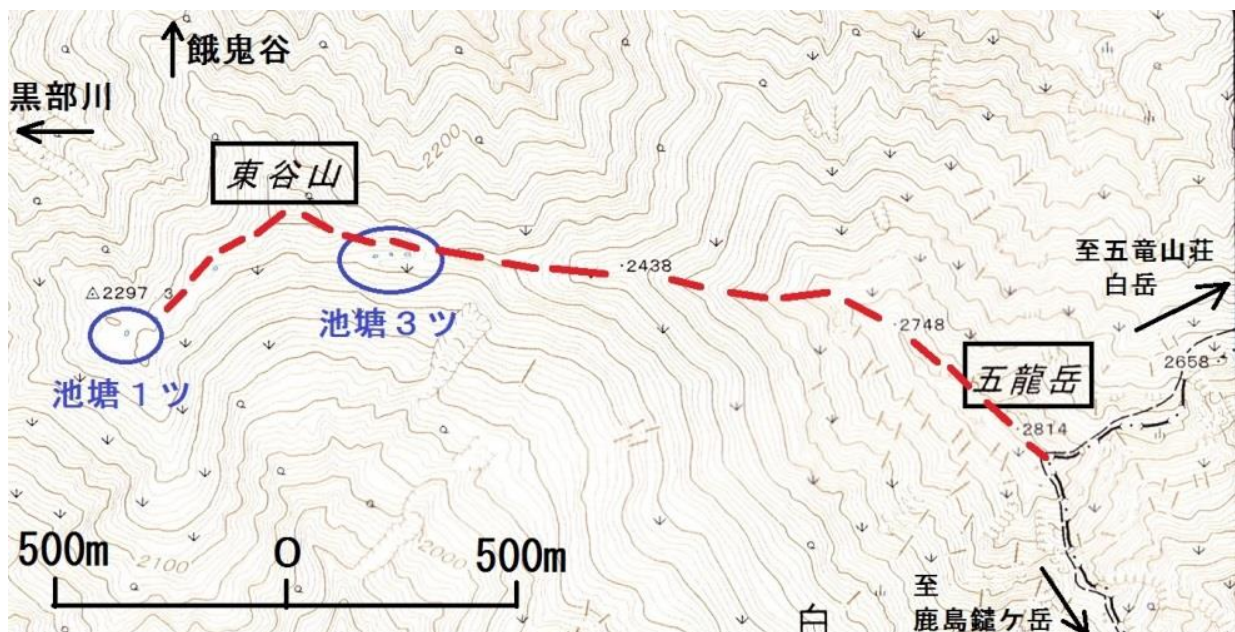
さて、この峰は何処でしょうか？

遠見尾根を独り黙々と登る。途中、カクネ里を見下ろす所に遭難慰霊碑があり、幽霊が怖い小生は後ろからしがみつかれる妄想にかられて足が震える。後立山縦走者は大抵は唐松岳や鹿島鏈ヶ岳から尾根通しに来るから、この馬鹿尾根を夏の炎天下に登るバカは少ない。ウンウンと唸りながら夕方に五龍の小屋に着いて天幕を張る。

翌日、五龍岳に向かう。五龍岳の頂上は縦走路から少し離れているので人影は少ないから、方向違いの方へ下っても注意されなくてよい。それに目標の峰がキャンプ禁止かどうかは知らないが、幕営指定地以外で幕営の装備を担いだザックを他人に見られるのはチト気が引ける。縦走路の人波が切れた頃を見計らって、黒部側に緩やかに下っている尾根に入る。踏跡はないが、所々ハイマツが切れて地面が露出した場所を選んで下る。雷鳥の親子が遊んでいる。黒部の深い溪を隔てて劔岳北方の池ノ平山、大窓、白ハゲ・赤ハゲ、赤谷山のゴツゴツした山なみが目の前である。

2748m 標高点を過ぎ傾斜が増したハイマツ斜面を泳ぐ様にして 2438m 標高点を下ると、傾斜が緩んだ舟窪状の稜線に小さな池塘が 3 つ並んでいた。

その右がこんもりと盛り上がり標高点でも三角点でもないが 2380m のピークである。緩やかなプロムナード状の尾根を少し下った小ピークにはもう一つの池塘があった。池の周りは小さな草原になっており、黒部側が切れ落ちて開けていて絶好のビューポイントである。ここには三角点の標石があり△2297.3 と表示されていた。まさに仙人天女の住む桃源郷。この尾根はここから先、緩急起伏を繰り返して黒部の阿曾原小屋に落ちているが、黒部の流れや小屋は山の陰で見えない。この尾根の北側は餓鬼谷という人跡稀な秘溪であり、また南側も険阻な溪で黒部第 4 地下発電所の上を奔りして S 字峡に注いでいる。そう、ここは五龍岳の西に位置する東谷山であり、この尾根を東谷尾根という。夏にこの尾根を登り降りする登山者は皆無で、積雪期に黒部に入るクライマーがたまにアプローチに利用するだけらしい。



何はともあれ、セルベッサを池で冷やしてグイッ〜とイッパイ。ボウフラのような生き物が泳いでいたが、何、気にすることは無い。折から夕暮れ、劔岳の岩稜の向こうに夕陽が沈みかけている。足元の黒部の溪には既に夕闇が迫って真っ暗だ。黒部からガスが這い昇って来て目の前は雲海。その雲海の上に劔岳のギザギザのシルエットが黒く浮かんでいる。真紅からピンク色に、やがて薄紫に染まった空は薄墨となり天球の蒼穹に溶け込んでゆく。この夜の山奥の山上にたった独りきりで座していると何か尋常ならざる冥界に迷い込んだようで、人心地もしない。テントに潜り込んでいつもの焼き肉を寂しく喰らい、セルベッサで無聊を誤魔化す。

この辺りには冬の五龍やキレットで遭難死した亡霊が未だ発見もされずにうろついているであろうと思うと恐怖でじっとしてられないくらい怖い。御叱呼を漏らしそうになる。そう言えば一昨年5月に五龍に行った時、横浜山岳会が行方不明になった会員を捜索していたが、一本一本沢筋を捜索することは大海の砂を探すに等しいと言っていたナ。その遭難者もまだ浮かばれていないであろうか。

行く雲や流れる水を友としてノンビリと沈殿するという計画は幽霊の恐怖に負かされて、翌朝早々に下山を決定。この尾根を藪漕ぎしながら阿曾原小屋に下るのが比較的簡単であるが、折角だからと名にし負う餓鬼谷を下ることにする。急な尾根を木の根に掴まって東側の餓鬼谷の源流に下る。この辺りはマムシが多いから何を掴むにも戦々恐々だ。降りるにつれて斜面が猛烈な傾斜となり懸垂で下る。河床に降り立った途端両岸が狭まり、地獄の底から天を覗くような廊下が現れた。深い翠の釜と猛烈な勢いで落下する奔流を備えた大蛇である。沢は、登る難しさに比べて下降はその何倍も難しい。おまけに単独である。最初に現れた滝は4段80m、これはどうすれば良いのだ?! 滝はジェット機の爆音のような轟音を轟かせてゴーゴーと落下する流心であり、両サイドの壁はテラスの全くない垂壁スラブが100mほど落ちているのみ。巻くことも出来ない。持参したザイルは50m1本のみ。補助ザイルでもあれば一回の懸垂で45mの高さを降りられるが、残念ながら左様なものは持参していない。幸い滝が4段になっていて水流の中を懸垂すれば20mの懸垂ですぐ下のテラスまでは降りられそうだから、これを4回繰り返せば何とかなるか。しかし懸垂のピンになるハーケンを打つリスが無かったら、これはもう上にも戻れず下にも降りられず、ここで宙づりになったまま滝に打たれて御名御璽となることは必定であろう(上に登り返すにはプルーゾック・テクニックがあるが、この猛瀑の水流に逆らって登る体力は小生には無い)。そのうち身体が水でブヨブヨに腐ってイワナの餌食となり、骨は流されてやがて土砂に埋まり遺骨さえ出なくなる。一説によると黒部ダムや樺平下の小屋平ダム底の砂泥には200体以上の遭難遺体が埋まっていると言われている。沢に迷い込んだり滑落したりして行方不明になった遭難者の行く末は大概このようなものである。

オカアチャン、助けてくれッ〜。南無八幡大菩薩、仏様、神様、キリシト様! 考えていても仕方がない、意を決して下るしか脱出する方法は無い。残置ピンが無いからハーケンを2本打って支点にして敢然と(実は恐る恐る)水流に飛び込む。ウワーッ〜、眼も口も空けておられない。肩を叩く水流が鉄砲玉のように痛い。モー、タマらん。やっとの思いで下から3段目の滝の落ち口に降りたが、強い水流に足を掬われそうになる。再びハーケンを打ってセルフビレーをセットし、ザイルを引いて次の懸垂の用意をする。轟々たる爆音で耳がおかしくなってきた。これを4回繰り返してやっとなりて滝壺の上まで降りたが、紺青の水を満々と湛えたお釜は深くて足が立たない。水で濡れた重いザイルを引っ張って泳いだ、逆巻くお釜の渦巻きに引き込まれそうになり慌ててザイルにしがみついた。

この後も断続的に現れる滝を全て懸垂で格闘している内に時間を浪費し、東谷山の西斜面から落ちる餓鬼谷・右股の出合で真っ暗となってしまった。両岸は切り立ったゴルジュで、鉄砲水でも来れば全く逃げ場がないが、ここで野宿するしか方法が無い。エーイ、どうにでもなれ、槍でも鉄砲でも持って来い! セルベッサも御神酒も無いから膝を抱いてウトウトするのみ。井戸の底から天を望めば遙か天空に赤い星が瞬いていた。ヤレヤレ助かったか。

翌朝、睡眠不足の朦朧たる頭で下流を見ると水面からモウモウと湯煙が昇っていた。餓鬼の湯である。こんな所まで遡行して湯に入りにくる馬鹿はいないから、専ら猿猴の湯浴み専用であろう。今生の別れに温泉にでも入っておくかと、砂地を掘り下げて小さい穴を掘り、ここに熱水を溜めてうめる水は本流から導いた。素っ裸になってムスコも開放してやり寝そべってみる。砂混じりの湯であるが湯加減は丁度良い。溪を覆っている崖の天辺から覆い被さっている樹々の緑の枝葉から真夏の陽光が洩れ、切り立った両壁は倒れてくるような錯覚を覚える。



ここから下流は差程の大滝も無かったが、餓鬼谷が黒部本流に合流する手前に 20m の豪快な大滝が落ちていて、左岸は絶壁でそのまま滝壺に落ち込んでいてどうにもならない。右岸は何とか懸垂で滝壺の横に降りられそうであったので崖の端に生えている立木を支点に懸垂ザイルを投下。ところがこの右岸の岩壁はかなり庇が突き出しているうえに、その下はオーバーハングしているから、ザイル末端が下まで達したかどうかの確認できない。懸垂はしたが下まで届かなければまたまた宙吊りで御名御璽である。しかし、その他に選択肢が無いのだから、ママヨ、エイヤーとザイルに身を託す。案の定滝壺の横の地面まで 5m ほど足らなかつた。地面に飛び下りるには高すぎる。飛び下りればたぶん骨折は免れぬだろう。かような所で骨折すれば助けを呼ぶわけにもいかず、御名御璽となるのは必定。取り敢えず懸垂ザイルを仮固定して、落ち着け落ち着けと紫煙を燻らすが、飛び散る滝の飛沫ですぐに消えてしまう。

参ったナア。ヨッシ、右に振りをつけて滝壺に落ちよう。少しぐらい水を呑むかもしれないがザックが浮袋になって溺れることはないだろう。ザイルを回収するために末端の 8 ノットを解いて片方のザイルにシュリングを結束した。南無三八幡大菩薩。振りをつけて身体を右に揺らし、エイッと制動側の手をザイルから離して滝に尻から落ち込んだ。衝撃で身体が水中深く沈み、頭の上の水面が渦巻いて光っているのが見えた。相当水を呑まされたが、何とか淵に這い上がった時には腰が抜けて立てなかつた。ジーッとそこに横たわったままで、うつろな眼には崖の樹々の緑だけが映っていたように思うが、ここら辺りの記憶は空白に近い。モヌケの殻のようになって黒部の水平歩道に這い上がり、6 時間も掛かってヨロヨロと樺平に辿り着いた。

この駄文は、豊かな感性と高度なクライミングテクニックを持っている小生だからこそできた想像上の仕事であって、余人は決してこのような真似をしてはいけない。上に書いたような遭難者の末路を迎えるのが関の山である。

ここに記したことは、地理院地形図記載の地図記号だけを頼りに、ありとあらゆる感性と想像力と推理を働かせて得た酔夢談であって、これを参考に山行して遭難しても当方は一切責任を負わないことを申し添えておきます。

(03/09/15 記)

(本稿 完)

[「夢幻の山旅 私の机上登山」目次へ戻る](#)